

*** 園～高校まで、動物飼育活動活用（動物介在教育）の教育計画 ***

（中川美穂子 白梅学園大学大学院論叢 創刊号）

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの育つ環境に人と感情を交流できる種類の動物において、意図して関わらせ愛情を感じさせることで、「子どもの成長に必要な」様々な刺激とする ・担当の教師に任せるのではなく、経営上の問題として全体で担当する ・獣医師等の知識と技術による支援を得て、衛生の観念など保護者の理解と支援を得る ・世話の簡単で適度な動物数を、掃除の簡単な飼育舎で飼育活動をする（大変な飼育はしない） 							
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・生物への興味と探求心を培う・自尊感情を高める。 ・言葉を持たない相手の気持ちを洞察する気持ちを養う（コミュニケーション能力） ・動物との交流で、友達や自分自身の体と心を理解することにつながる（共存） ・暑さ寒さへの配慮など、命をまもる細かい配慮を培う ・将来の子育てにつながる ・（～のために）との、労働の動機と技術を養う（体の使い方、力の入れ具合） 			<ul style="list-style-type: none"> ・道徳の生命尊重の指導の重要な基礎体験 ・道徳の思いやりの教育の重要な基礎体験 ・生物教育の基礎体験（ほ乳類 鳥類 は虫類 魚類 両生類等） ・衛生教育の基礎 清潔・不潔の理解 			
基本的 関わらせ 方	命を守るために必要なこと 暑さ寒さ予防 住居の清潔 新鮮な栄養と水 動物の偏食予防 かわいがる	指導法	最初に、基本的な動物との接触法（年齢により）を獣医師支援の飼育導入授業で伝える 日常の世話（掃除、餌と水を与えて、優しい接触で、動物が「かわいがられてる」と感じるように扱う）を通じて、苦勞と喜びを実感させる それができる自分の価値に気付かせる 暑さ寒さへの配慮を伝え 動物が、こちらのすることをどのように感じているかを洞察させる 動物が喜んでいてるか？困っていないかを、良く観察させて洞察する習慣を培う 動物にも個性があることを観察と接触により、理解できるようにする				
年齢別	0歳～3歳児 環境 人間関係	4歳～5歳児 環境 人間関係	1年～2年 生活科継続飼育	3年～4年 総合・委員会活動	5年～6年 総合・委員会・理科	中学校 (学級活動、理科)	高等学校
ねらい	好奇心・感性を開く	好奇心 感性・愛情 死の理解	愛情・かばう 観察力・共感 責任・協力・探求心	労働・責任・共感・協力・ 観察力・探求心・死の悲しみ(生命尊重)	動物の知識や活動への 自信の発展	大事に思う対象を与える 優しさを引き出す 知識の発展・探求心・生徒の精神の安定	
関わり指導	大人と一緒に、大人が持つ動物を見る などで	大人がいるところで、膝に抱く	世話の簡単な動物を飼う	飼育舎の管理の意味と方法を教える 飼育導入授業を行う	担当せず、下級生への指導 知識を深め下級生に伝える	人と動物の関係を考えさせる クラス内のペットとして簡単な動物を飼う	
動物種 基本飼育	世話の簡単なチャボ	保育園・チャボ 幼稚園・モルモット、ウサギ、チャボ	教室の内外で モルモット・ハムスター・文鳥	飼育舎の管理に適切な年齢 チャボ・ウサギ	飼うなら：クラス内 ペットのモルモットやハムスター、金魚等、 理科マイメダカ	教室内の文鳥 金魚 マイメダカ*1	水槽の生物 クラスが荒れている時は文鳥
発展活動	散歩での動物発見	+動物園訪問	+動物園訪問	水族館・動物園 動物調べ	動物調べ・畜産体験・ 下級生への世話指導	畜産体験・ 乳製品作り	畜産体験・鶏肉や ハム作り
休日	保護者が交替で参加（親子当番） 交替でホームステイ		親子当番。*2		水槽以外はホームステイ		
支援内容	子どもが持ち込む動物を保育者も興味を持って飼う 動物への共感を培うような言葉かけ 衛生などの注意について獣医師と交流する 管理法やふれあい法も獣医師の助言と支援を求める		清掃・餌やりを最初は毎日指導する 命には休みがないとを伝える 獣医師の支援を得る		専門家の支援を得て、児童の質問に答える機会を用意する		皆でかわいがる環境に発展させる 失敗をおそれず、持続により、生徒の精神の安定と理科の授業への発展を期待する 食肉の成り立ちを自覚させる

*1 マイメダカ：児童が一人ひとり小さなジップ付きポリ袋で、メダカの受精卵1つずつを養い、発生を観察し育てる授業 研究心と命の実感を期待する
 *2 親子当番：休日の世話の主体は子どもだが、危険なため親とともに登校して世話をする。親子の会話、親の偉大さや子どもの動物好きなど相互理解できる。効果大